

典礼以外での、音楽による 福音告知の可能性

吉 田 徳 子
吉 田 文

はじめに

1987年に「教会聖堂内でのコンサート」についての声明がバチカンから発表され、カトリック教会としての教会でのコンサートの扱いについての方向性が示された。

「使用目的が、場所の神聖さに反してはならないとする基本原則は、教会堂を教会音楽および宗教的な音楽を演奏するコンサートのために開放すべきかどうかの基準となる。教会堂はその他の種類の音楽には開放すべきではない。したがって例えばいかに美しい交響曲であっても、それ自体は宗教曲ではない。宗教曲と名づけられるには、器楽曲にせよ声楽曲にせよ、本来の目的と内容から発するものでなければならない。」¹⁾とされている第8条を始め、聖堂内でのコンサートは許可され、その目的によっては推進されるものであるが、内容は純粋な宗教曲であること、演奏者、主催者、聴衆にも聖堂という神聖な場所への配慮が必要な事、又、運営上で留意する点などが指示されている。

コンサートという典礼外の目的に聖堂の使用が認められる理由としては、同書第9条に

「典礼のために作曲されたものの上記(注:典礼の形態が変化したために)の理由からもはやミサ聖祭等の典礼に用いられなくなった教会音楽や、聖書の言葉や典礼からインスピレーションを受けた、あるいは神、おとめマリア、聖人、教会を主題とした宗教音楽はすべからず教会内にその場を占めるものであるが、しかしそれは聖祭典礼以外の場合においてである。オ

ルガンの響きや、その他の声楽、器楽の演奏は敬虔さや宗教心を促進することができる。これらを典礼外で上演する際、とりわけ下記の諸点がふさわしい。」²⁾とされ、以下具体的な上演の状況が次のように記述されている。

- 「a) 大切な典礼の祭日に心の準備をさせるため、もしくはミサ聖祭以外においても、祝祭の性格を高める。
- b) さまざまに異なる典礼暦の特別な性格を強調するため。
- c) 教会堂の中に静けさと観想の雰囲気をつくり、教会からはなれていて人たちにも霊的なものへの傾倒を促すため。
- d) 神の言葉を伝え、その受け入れを容易にする環境をつくり、たとえばそのなかで福音書を（続けて）朗読する。
- e) 失われてはならない教会音楽の大きな宝を守るため。今日ではもうそのままでは容易に典礼に取り入れられない作品や声楽曲などを指す。オラトリオやカンタータなど今日においても霊的な豊かさを与える宗教音楽もそうである。
- f) 教会堂を訪れる人や観光で来る人たちに教会の神聖な性格をより良く理解する助けとなるために。例えば決まった時間にオルガンコンサートを行うなど。」³⁾

本稿はこの声明「教会聖堂内でのコンサート」の第9条を元に、パイプオルガンの楽曲を中心とし、南山短期大学の聖歌隊ヴォックス・アンジェリカ等と共同で演奏したコンサートの例をはじめ、コンサートというキリスト教信者のみならず、一般の聴衆を対象とした場において、福音の告知を念頭に置いた教会聖堂内のコンサートを行なうのに、どのような具体的な可能性があるのか、示していきたいと思う。

1. 具体例

1.1 祝日・典礼暦の性格を強調する

1.1.1 待降節・降誕節

教会固有の典礼暦のうち、クリスマスやイースターとして非キリスト教

信者にも聞き慣れた祝日もあれば、待降節、四旬節、主の昇天、聖霊降臨、三位一体の主日、各聖人の祝日など、一見では理解され難い祝日もある。

特に、「クリスマス」として知られている主の降誕の祝日は、キリスト教でイエス・キリストの降誕を祝うものだというのが日本では一般的にはあまり知られておらず、表面上のみの慣習として定着しているのが現状である。しかし、非キリスト教信者のうちにも慣習として根付いているこの祝日は、反面、キリスト教会が福音を伝える機会ともなり易い。

ここに、一つの試みとして実際にコンサート形式で演奏したプログラムを記す。

例① 「アドヴェント・コンサート」

第1部 待降節の歌と作品

聖歌隊	グレゴリオ聖歌 いらしてください、救い主よ Veni, redemptor omnium
オルガン	ヨハン・セバスティアン バッハ (1685-1750) いま来りたまえ、救いの主イエス Nun komm, der Heiden Heiland BWV 659
合唱	ルター讃美歌 いま来りたまえ、救いの主イエス
オルガン	ヨハン・セバスティアン バッハ いま来りたまえ、救いの主イエス BWV 661

第2部 降誕節の歌と作品

聖歌隊	グレゴリオ聖歌 今日救い主が生まれた Hodie Christus natus est
聖歌隊	ルター讃美歌 天のかなたから Von Himmel hoch da komm ich her
オルガン	ヨハン・セバスティアン バッハ 天のかなたから BWV 738

聖歌隊	ドイツ聖歌（17 世紀）
	天よ歓呼せよ Jauchzet, ihr Himmel
オルガン	ヨハン・セバスティアン バッハ
	天よりいま来たりませ、イエス
	Kommst du nun Jesu, vom Himmel herunter BWV 650
聖歌隊	ドイツキャロル（14 世紀）
	今こそ声あげ In dulci Jubilo
オルガン	ヨハン・セバスティアン バッハ
	今こそ声あげ BWV 729
聖歌隊	ドイツキャロル（15 世紀）
	エッサイの根より Es ist ein Ros' entsprungen
オルガン	ヨハン・ゲオルグ ヘルツォーク（1822-1909）
	エッサイの根より
聖歌隊&会衆	聖歌（17, 18 世紀）
	アデステ・フィデレス・きたれ友よ
オルガン	カール・ザットラー（1874-1938）
	アデステ・フィデレスのテーマによるイントロダク ション・フーガ・フィナーレ

第3部 オルガン交響詩“降誕の神秘”

オギュスト フォシャード (1881-1957)

Le Mystère de Noël 降誕の神秘

Poème Symphonique sous form de Choral Variés sur l'Hymne de Noel "Jesu
Redemptor omnium"

降誕節賛歌“万人の救い主イエス”によるコラール変奏曲形式交響詩

オルガン テーマ：神秘

みことばは人となった！ ともにあがめたたえよう。

(ヨハネ 1, 14)

聖歌隊 グレゴリオ聖歌 賛歌 Christe Redemptor omnium 1 節

- Christe Redemptor omnium, Ex Patre Patris Unice,
Solus ante principium Natus ineffabiliter:
- オルガン 変奏曲 1：神の子
ひとりのみどりごがわれわれのために生まれた。ひとりの男の子がわれわれに与えられた。(イザヤ 9, 6)
- 聖歌隊 グレゴリオ聖歌 賛歌 Christe Redemptor omnium 2 節
Tu lumen, Tu splendor Patris, Tu spes perennis omnium;
Intende quas fundunt preces Tui per orbem famuli.
- オルガン 変奏曲 2：羊飼いたち
羊飼いたちは急いで行き、かいばおけに寝ている乳飲み子を捜しあてた。(ルカ 2, 16)
- 聖歌隊 グレゴリオ聖歌 賛歌 Christe Redemptor omnium 3 節
Salutis auctor, recale Quod nostri quondam corporis,
Ex illibata Virgine Nascendo, formam sumpseris.
- オルガン 変奏曲 3：聖母マリア
マリアはこれらのことを心に留めた。(ルカ 2, 19)
- 聖歌隊 グレゴリオ聖歌 賛歌 Jesu Redemptor omnium 3 節
Hunc astra, tellus aequora Hunc omne coelo subset,
Salutis auctorem novae Novo salutatur cantico.
- オルガン 変奏曲 4：星
星が先立って進み、幼な子のおられる場所の上まで来て止まった。(マタイ 2, 9)
- 聖歌隊 グレゴリオ聖歌 賛歌 Jesu Redemptor omnium 2 節
Memento, rerum Conditor, Nostri quod olim corporis
Sacrata ab alvo Virginis Nascendo formam sumpseris.
- オルガン 変奏曲 5：苦悩の祈り
万物の創り主よ、わたしたちを想い起こしてください。あなたは世の救いとしておいでになります。 (“主の降誕” の祭日の賛歌より)

聖歌隊	グレゴリオ聖歌 賛歌 Christe Redemptor omnium 5 節 Hunc cælum, terra, Hunc mare, Hunc omne quod in eis est, Auctorem adventus Tui Laudat, exultans cantico.
オルガン	変奏曲 6：全世界の歌 星と大地と大海原は、新しい歌をもってあなたを喜び 迎えます。（“主の降誕”の祭日の賛歌より）
聖歌隊	グレゴリオ聖歌 賛歌 Christe (Jesu) Redemptor omnium 7 節 Iesu, tibi sit Gloria, Qui natus es de Virgine, Cum Patre et Sancto Spiritu, In sempiterna sæcula. Amen.
オルガン	変奏曲 7・フィナーレ：人性の賛歌 (例①終わり)

「クリスマス」のコンサートを日本で実行する上で問題になるのが、日程である。厳格には降誕節は 12 月 24 日から 25 日にかけての夜中のミサから始まるのだが、周知の通り、日本では 25 日には町中のデコレーションが一夜で正月のものと化してしまう程、クリスマスが 24 日の夜中からそもそも始まるものだという意識は薄い。そのため、本企画では日時を教会暦の上では待降節である 12 月初旬とし、「アドヴェント・コンサート」と名付け、3 部形式のうちの第 1 部に待降節の聖歌と楽曲を演奏することにより、その時点でおかれている典礼暦を新たに意識させるものとした。

第 2 部では、主にドイツの両宗派の教会で歌われている聖歌を合唱により提示し、その聖歌について作曲されたコラル編曲をパイプオルガンで演奏することにより、言葉のない器楽曲だけでは理解し難い作品の内容に聴衆が触れられるよう工夫をした。

一つのまとまった大形式の楽曲として、第 3 部はフランスの作曲家オギュスト・フォシャードが作曲をした「降誕の神秘」という変奏曲を取り上げた。この曲は降誕節の聖務日課のうち午後の祈りの中で歌われていた賛歌「Jesu (Christe) Redemptor omnium」をテーマとし、その賛歌の旋律を

使用して聖書や賛歌のテキストをモットーとした変奏曲により、クリスマスの様々な状況を音楽的に描写したものである。また、古来より賛歌を歌うときには、一節ごとに歌とオルガンとで交互に演奏するアルタナティブという方法がある。今回はこの方法を用いて、聖歌隊が歌う本来の賛歌と、パイプオルガンによる変奏曲を交互に演奏し、カトリック典礼内で歴史的に成立した古い音楽の形式も示すこととした。

そして、コンサートの全3部を通して一貫するのは、カトリック教会固有の聖歌、グレゴリオ聖歌である。第1部の冒頭には待降節の賛歌「Veni, redemptor omnium」、第2部の冒頭には降誕節の聖母賛歌の交唱「Hodie Christus natus est」、第3部には前記のように降誕節の賛歌「Jesu (Christe) Redemptor omnium」をモットーとして取り上げた。

又、プログラムの作品名を配布するのみでは、このような内容を示すことが困難なため、何故、今日のコンサートで、このプログラムなのか、という事を解説することも必要だと考え、プログラムに解説を添えた。

付録として本稿末尾にその解説テキストを掲載する。(付録①)

1.1.2 聖ペトロと聖パウロの祝日

キリスト教の祝日の中でもクリスマスが一般的に慣習として日本で知られているのに対し、その他の祝日は信者でもない限り殆ど知られていないと言っても差し支えないであろう。

しかし、教会は所謂クリスマスシーズンばかりにコンサートを催すのではなく、他の多くの時節においても音楽を通して福音を伝える機会はある。

以下、日本ではマイナーな祝日の性格を現し、強調する例として、6月29日の聖ペトロと聖パウロの祝日に催されたコンサートの内容を挙げる。

例② 「教会の響き」プログラム

聖歌隊 グレゴリオ聖歌

あなたはペトロ Tu es Petrus et super hanc petram aedificabo
ecclesiam meam.

- オルガン アンリ・ミュレー（1878-1967）
組曲「ビザンツ・スケッチ」より from “Esquisses byzantines”
・あなたはペトロ（ペトラ・岩） Tu es petra et portae inferi
non praevallebunt adversus eam.
・薔薇窓
・鐘つき塔
- 聖歌隊 ヨハン・セバスティアン・バッハ（1685-1750）
主よ、人の望みの喜びよ Jesus bleibet meine Freude
- オルガン ジャロミール・ワインベルガー（1896-1967）
聖書によるポエムス Bible Poems
1. 一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になります
し、もう日も傾いていますから
2. 湖の上を歩く主イエス
3. カナの婚礼
4. ホザンナ
5. 最後の晩餐
6. イスラエルよ、聞け（古いイスラエルの歌）
- 聖歌隊 ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756-1791）
アヴェ ヴェルム コルプス Ave verum corpus
- オルガン オリヴィエ・メシアン（1908-1992）
・天上の饗宴 La Banquet Céleste
- 聖歌隊 シャルル・グノー（1811-1893）
主をほめ讃えよ Laudate Dominum
- オルガン ルイ・ヴィエルネ（1870-1937）
ウェストミンスターの鐘 Carillon de Westminster
(例②終わり)

このプログラムでは聖ペトロの祝日に歌われる交唱「Tu es Petrus」をモットーとし、「教会」をテーマとした。

「教会」とは、建物としての教会としてよりも「共同体」としての意味がある。この「教会」という言葉の様々な観点を音楽として扱った作品を集めてみた。

冒頭にグレゴリオ聖歌の「Tu es Petrus」、そしてミュレー作曲の「Tu es petra」を演奏することにより、本コンサートのテーマを提示した上で、「建物」としての教会を描写した「薔薇窓」「鐘つき塔」がオルガンで独奏される。そして、イエスによって呼び集められ信仰を共にする共同体の信頼を歌うバッハのカンタータ 147 番のコラールが合唱によって歌われた後、教会の聖典である聖書の場面をテーマとしたワインベルガーの「聖書によるポエムス」へと続く。「聖書によるポエムス」にも描写された最後の晩餐、受難、そして復活により成就された神の人間に対する救済を受けて聖餐式に現存する神をテーマとしたモーツァルトの「アヴェ・ヴェルム・コルプス」、メシヤンの「天上の饗宴」と「永遠の教会の出現」を演奏した後、グノーの「主をほめ讃えよ」により神への普遍的な賛美が歌われ、最後には有名なウェストミンスター教会の鐘をテーマとしたヴィエルネの作品によって締めくくられる。

付録②としてこのコンサートの解説も掲載する。

1.2 静けさと瞑想の雰囲気

現代の喧騒の中で、教会という特別な場所に祈りの静けさ、瞑想の雰囲気を求める人も少なくはないであろう。パイプオルガンを使った瞑想の例としては、聖書や諸テキストの朗読とパイプオルガンの作品の演奏が交互に行なわれるようなものがまず挙げられるであろうか。「十字架の道行き」や「キリストの十字架上で 7 つのことば」なども考えられるが、状況的な描写についての瞑想だけではなく、「神の愛」「神への信頼」「聖母マリア」等をテーマとし、新・旧約聖書から朗読箇所を抜粋することもできれば、聖書に関わらず教父の書物、その他の自由なテキストを使用することも考えられるだろう。音楽は、コラール編曲を使用すれば、テーマとしては一貫性のあるものとなるが、朗読されたテキストが、その後に演奏され

る音楽の「響き」のうちにより深い瞑想ともなり得るので、テキストを映し出すような自由な曲の選択でも適切であると思う。

運営的に問題がない場合は、視覚的なメディアを使用することも考えられるであろう。祭壇画等の宗教的な絵画、アイコン、彫刻等の写真を投射し、見合った瞑想テキストと音楽を組み合わせることも効果的である。

1.3 神の言葉を伝える

「受難曲」「ヒストリア」という楽曲が典礼内での朗読から始まったように、聖書の朗読を支柱とし、朗読の要所に内容に合った音楽的な要素を加えることにより、「ことばの典礼」により近い形で聖堂内で音楽を演奏することもできる。

ここでは再度「クリスマス」を例に挙げてみたいと思う。

ルカの福音書の朗読を中心とし、朗読の前後にその内容を再現する聖歌とオルガン作品を演奏、又は会衆の聖歌斉唱も含めることができる。

例③ みんなで歌うコンサート・パイプオルガンと合唱と聖歌によるクリスマスのお話

- | | |
|-------|---|
| ・オルガン | グスタフ・ウンベハウン <i>Gustav Unbehann</i>
高く戸を上げよ
<i>Macht hoch, die Tür</i> |
| ・聖歌隊 | 聖歌「高く戸を上げよ」 |

聖書朗読（ルカによる福音書 1 章 26 節～ 37 節）

- | | |
|-------|----------------------------------|
| ・聖歌隊 | グレゴリオ聖歌 アヴェ・マリア <i>Ave Maria</i> |
| ・オルガン | ジクフリッド・カルク＝エラート アヴェ・マリア |

聖書朗読（ルカによる福音書 1 章 38 節）

- | | |
|-------|---|
| ・聖歌隊 | 聖歌「エッサイの根より」 <i>Es ist ein Ros' entsprungen</i> |
| ・オルガン | カール・ザットラー <i>Carl Sattler</i> エッサ |

イの根より

聖書朗読（ルカによる福音書 2 章 1 節～ 7 節）

- ・聖歌隊 グレゴリオ聖歌 今日キリストがお生まれ
 になった
 Hodie Christus natus est

- ・オルガン&合唱 クロード・ダカン ノエル「今日キリスト
 がお生まれになった」

聖書朗読（ルカによる福音書 2 章 8 節～ 14 節）

- ・オルガン マックス・レーガー グローリア
- ・聖歌隊 聖歌「あら野のはてに・Angels we have heard
 on high」（英語）
- ・聖歌隊&会衆 聖歌「あら野のはてに」（日本語）

聖書朗読（ルカによる福音書 2 章 15 節, 16 節）

- ・聖歌隊 聖歌「まきびと・The first Noel」（英語）
- ・聖歌隊&会衆 聖歌「まきびと・The first Noel」（日本語）

聖書朗読（ルカによる福音書 2 章 17 節～ 21 節）

- ・聖歌隊 ゲオルク・フリードリッヒ・ヘンデル 「メ
 サイヤ」よりハレルヤ
- ・聖歌隊&会衆 聖歌「もろびとこぞりて」
- ・聖歌隊&会衆&オルガン カール・ザットラー Carl Sattler
 きたれ友よ

- オルガン テーマ
- 聖歌隊 *Adeste, fideles, laeti triumphantes; (...)*
- オルガン 変奏曲 I
- 聖歌隊 *En grege relicto, humiles ad cunas (...)*
- オルガン 変奏曲 II
- 聖歌隊 *Pro nobis egenum et foeno cubantem (...)*
- オルガン 変奏曲 III
- 会衆 1. いそぎ来たれ、主にある民、 (...)

2. 光の主よ、神の神よ、 (...)

3. 今われらも 共に歌わん、 (...)

4. 永遠(とこしえ)なる 神のことは (...)

- オルガン 変奏曲IV

- オルガン フーガとフィナーレ

・ 聖歌隊 & 会衆 聖歌「静けき真夜中」

(例③終わり)

会衆用のプログラムにはキリスト教会の祝うクリスマスの意味、そして聖歌や合唱曲の全テキストを印刷した。反面、聖書のテキストは「読む」のではなく「聞く」ことに重点を置き、聖書の箇所を参照とするのみにとどめた。

1.4 失われてはならない教会音楽の大きな宝を守る

この項については、特に「オラトリオやカンタータなど今日においても霊的な豊かさを与える宗教音楽」と称されているように、「容易に典礼に取り入れられない作品や声楽曲」、特に大規模な宗教曲、特に声楽曲が挙げられている。

カトリックの典礼に発するパイプオルガン作品の分野では、典礼用に使われていたものの、典礼改革後にその場を失った聖体奉挙 Elevatio 用の作品、現在ではグレゴリオ聖歌が稀にしか典礼で歌われなくなった為にその本来の機能が発揮できないアルタナーティム⁴⁾の作品等が考えられるが、グレゴリオ聖歌そのものが今日の日本では幾つかの限られた通常文しか歌われる機会がないことを思うと、グレゴリオ聖歌の旋律をモチーフとした作品をコンサートで演奏することも無意味ではないであろうし、グレゴリオ聖歌を歌うスコラとの共同のコンサートということも考えられる。

又、カトリック固有のミサより音楽的な要素を抜粋したコンサートや聖務日課の形式をコンサートへ取り入れる事も、典礼の形式、至っては典礼そのものの意味を伝えるという意味で非常に有意義なのではないだろう

か。

聖歌隊が典礼用の「ミサ曲」を演奏することを前提として、例を挙げてみる

例④ 「ミサ」形式のコンサート

オルガン	典礼用の入祭の曲の他、イントロダクション、前奏曲、幻想曲など華やかな作品 例：マックス・レーガー 前奏曲 op. 59, 1
聖歌隊	キリエ
聖歌隊	グローリア
オルガン	例：サイモン・プレストン ハレルヤ
聖歌隊	クレド
オルガン	奉納唱 例：フランソワ・クーブラン 奉納唱
聖歌隊	サンクトゥス・ベネディクトゥス
オルガン	聖体奉挙 例：エンリコ・ボッシ エレヴァティオ
聖歌隊	アニュス・デイ
オルガン	拝領唱 例：ルイ・ヴィエルネ 拝領唱
オルガン	退堂用の作品、もしくはテ・デウムや聖母マリアをテーマにした作品など 例：ジャンヌ・デメッシュー テ・デウム

(例④終わり)

オルガンのみでの「午後の祈り・ヴェスペル」の例

例⑤

入祭	前奏曲など 例：ヨハン・セバスティアン・バッハ 幻想曲
----	--------------------------------

BWV572

賛歌

賛歌・Hymnus の旋律をテーマにした作品

例：ニコラ・ド・グリニー 賛歌「来たれ、聖霊よ」

詩編唱

詩編を元にした作品、もしくはコラルの編曲や、
聖書や祈りの句を基に作られた作品など

例：マティアス・ケルン オルガンの為のリトネル

I 門は開いている、それ以上に心も開いている。

— II 見よ、神の幕屋が人の間にある。—

III 彼があげぼの星である。— IV 霊は天に住まい

がある。— V 信仰は神への強い希望。—

VI 神はわたしたちを祝福される。

マグニフィカート

マグニフィカート（聖母賛歌）の作品

例：マティアス・ヴェックマン 第二旋法による

マグニフィカート

主の祈り

「天にまします我らの父よ」を基にしたコラル
編曲など

例：ヨハン・セバスティアン・バッハ 天にまし

ます我らの父よ BWV 762

退堂

退堂用の作品、もしくはテ・デウムや聖母マリア
をテーマにした作品など

例：カール・ザットラー「めでたし、女王、憐れ

みの母」による幻想曲とフーガ op. 5

（例⑤終わり）

1.5 定時のコンサートの実行

この項は内容ではなく方法を示している訳だが、ミサ後や週末にマティ
ネーとして、又は午後や夕のヴェスペルとしてなど、聖務日課の時間をコ
ンサートによる瞑想の時間と設定することにより、よりカトリック典礼へ
のコンサートの繋がりが強く示されることもできるだろう。

又、教会暦の季節ごとのメディテーションとして行なうことにより、各時節の性格が強く打ち出すことができるであろう。

おわりに

2000 年以上のキリスト教史の中で宗教音楽として作曲された楽曲は数えきれない程あり、コンサートを行なう上での楽曲や形式の選択の可能性は無限大に存在する。本稿ではその中で、わずかな形式の例を挙げるに過ぎなかったが、コンサートの内容、曲の選択自体をいかに関係づけるかということに視点を置く事により、福音のメッセージをよりの確に伝えることができるかという事を示す試みをした。

そして、作品の選択も非常に重要なのだが、最終的には教皇ベネディクト 16 世が初の回勅「神は愛」で「さらに、キリスト教的な慈善事業が宣教の道具となってはなりません。(…)単なる活動主義に陥らないため、聖パウロの『愛の賛歌』(1 コリント 13 章)が教会のすべての奉仕の大原則です。」と、述べているように、音楽、コンサートは宣教の道具でもなければ、ましてや音楽家が自己の技術・芸術を発表する場なのでもない。

聖堂という神聖な場所で、神の愛が純粋な音楽の響きとして伝わるときに、福音の告知が初めて可能になるのではないか。

付録①

「アドヴェント・コンサート」解説

キリスト教会では 12 月 25 日から 1 月 6 日までキリストの生誕のお祝いである降誕節、いわゆるクリスマスが祝われます。

12 月 25 日の 4 週間前の日曜日からクリスマス前日の 12 月 24 日までの期間を、キリストの降誕を待ち望み、私たちの心の準備をもする時期として、待降節と呼びます。

キリストが救い主として、父である神から遣わされ、おとめマリアを通して人となったことを感謝するクリスマスの祝日は、厳しく、寒く、暗く、

その上長いヨーロッパの冬の環境のなかではとても喜ばしいお祝いの日でもありましたので、カトリック教会の典礼の中で歌われ続けたグレゴリオ聖歌の他にも、ラテン語の知識がなくとも理解ができ歌えられる、クリスマスの喜びを表す、もしくはクリスマスの出来事を伝えるドイツ語やフランス語などの国語の歌がとても多く作られました。

又、16世紀以降にはマルティン・ルターを中心とした、それまでラテン語で挙げられていたミサの代わりに国語での礼拝の導入を進めた宗教改革の運動が強まると同時に、必然的に、多くのドイツ語の聖歌がプロテスタント教会内で創られる結果ともなりました。

第一部では、待降節の聖歌の代表的なものである、Nun komm, der Heiden Heiland（ヌン コム デァ ハイデン ハイランド）（いらして下さい、救い主よ）のみを取り上げてみました。

この聖歌は代表的なだけではなく、とても歴史のあるものです。

最初に歌われる *Veni redemptor gentium* というグレゴリオ聖歌は、4世紀にミラノの大司教であったアンブロジウスにより作られた待降節の賛歌（Hymnus）です。賛歌とは、カトリックの聖務日課に歌われるラテン語の歌ですが、ギリシャの韻律を踏んだ詩の形が元となっており、何節かの詩節を同じ旋律で歌う聖歌です。

グレゴリオ聖歌のレパートリーの殆どが聖書の言葉を旋律化したものであるのに対し、賛歌のみは自由に創作されたテキストを使用しています。

アンブロジウスは西暦340年頃にドイツのトリアーで生まれ、373年に法律家としてミラノに勤務、374年に司教となった人物で、当時の典礼の形成に大きな影響を与えました。

母音唱でメリスマの多い他のグレゴリオ聖歌よりも比較的覚えやすかった賛歌の特徴を生かし、布教のためにも多くの賛歌を作り、典礼へ取り入れました。

現在知られているこの曲の歌詞は *Veni redemptor gentium*（世の救い主

よ、来てください）で始まり、7節の歌詞を持っています。

アンブロジーオの聖歌ではこの賛歌は元来、8節から成り立っており、第1節は *Intende, qui regis Israel* の歌詞で始まります。

詩篇 80 の「イスラエルを牧するかたよ、耳を傾けてください。ヨセフを羊の群れのように導くかた、光を放ってください。ケルビムの上に座しておられるかた。」（典礼委員会詩篇小委員会翻訳「詩篇」あかし書房による）という内容です。しかし、この1節めは文学的、詩的な観念から他の節に比べて劣っていると見なされたらしく、早い時期から除かれた可能性が強いようです。

反面、*Veni, redemptor gentium*

（世界の救い主よ、来たまえ）という呼びかけで始まる第2節はその理解し易く、決然とした言い表し方から自然と第1節になったものと思われます。

アンブロジーオ聖歌の旋律が初期の頃どの様な旋律だったのかは、現在では判りません。現在残っている一番古い旋律はスイスのアインジーデルンにある修道院に12世紀に書き残されたものであり、それ以前の旋律は残されていないからです。

しかし、この、12世紀には既に存在していた旋律は、マルティン・ルターも知っていたものだと思います。

このラテン語のアンブロジーオ賛歌の歌詞を元に、マルティン・ルターはドイツ語へと訳し、旋律も拍数にとらわれないグレゴリオ聖歌の形から、ドイツ人に歌いやすい2拍子の賛美歌へと書き直され、賛美歌 *Nun komm, der Heiden Heiland* が作られました。

第2部では、ドイツのクリスマス聖歌と、これらの聖歌を元にして作られたオルガン曲が演奏されます。

Vom Himmel hoch, da komm ich her（天のかなたから）は、マルティン・ルターが自分の子供達の為に作ったと伝えられています。ドイツ語の原作は15節から成り立っており、前半では天使がイエスの誕生の喜びを告げ、

後半では子供達がイエスを心に迎え、祈りや歌を捧げる様が歌われます。

Jauchzet, ihr Himmel

17世紀の終わり、ヨーロッパ全体が30年戦争で荒らされた直後に生まれたゲハルド・テルステーゲンというプロテスタントの神秘主義者によって、このテキストは書かれました。《キリストの生誕によって神自身が人となり地へと降誕し、人類の救いへの扉が開かれた。私達もこの扉に向かってキリストと神のところに行くように、神よ、あなたも私のうちに生まれてください》という内容です。旋律は当時から良く知られていた Lobet den Herren（ほめたたえよ、力強い主を / 讃美歌 21・7 番）から取られています。

Kommst du nun, Jesu, vom Himmel herunter

そして、このオルガン曲の元となった聖歌も同じく、Lobet den Herren の旋律に、主の降誕を待ち望むクリスマスの歌詞がつけられています。

In dulci jubilo

現在に至るまで歌い継がれているドイツキャロルの中でも、最も古いものにこの歌は属します。

ケルン・ドミニコ会の修道士であり、神秘思想家であったズゾ（ca. 1300–1366）に天の音楽士が現れ、この歌を歌い、ズゾに全ての悩みを忘れ一緒に踊るようにと誘った折に奏でた音楽がこの In dulci jubilo であった、という伝説が残されています。

真偽はともかく、14世紀にケルン地方を中心として広まってゆき、16世紀にはプロテスタント教会の讃美歌集にも、マリア信仰を歌った4節めを除いて収録されています。

舞踏曲のように軽やかな旋律につけて、一見甘美な詩が歌われるようですが、この歌の中ではイエスの生誕という出来事の瞬間に、救いの

始まりと終わりの間の出来事が、時間という枠を超えて一度に起こります。

1 節では、まぶねの中の子供は太陽の光のように輝き（キリストの変容、復活のからだ）、2 節ではイエスに対する呼びかけが *Jesu parvule*（小さなイエス）*puer optime*（すばらしい少年）*princeps gloriae*（平和の王）と高じていきます。そして 3 節では天使が歌を歌い、— *nova cantica* — 平和の王が続じる終末の天の国へと目が向けられ、*Eya qualia*（何という！）喜びが天の国では待っているのだろうと歌われています。

Es ist ein Ros entsprungen

この聖歌も作者が知れなく、自然にドイツ語圏で広まっていったようですが、最古の記録は 1588 年にドイツ西部のトリアでカルトゥスシエンシス修道士であったコンラドゥスが、祈りや賛歌を書き込んだノートの中に、覚え書きで書いたであろうと思われるこの聖歌のテキストが見いだされます。1599 年の史料には、マリアを讃える歌として書かれていますが、内容は木の樹幹に比喻される古い系譜よりイエスが Ros（バラ）もしくは Reis（若枝）として、咲きでる模様を描いています。

15、16 世紀にカルトゥスシエンシス修道会を中心に広まっていき、プロテスタント教会の中にまで取り入れられた際に、それまであった 23 節のうちマリアの崇拝を書いた節が排除され、1609 年にミヒャエル プレトリウスが編曲したプロテスタントの歌集にも収録された際に最初の 2 節のみが残され、テキストも多少短くされ、今日でも知られているテキストと旋律の形が整えられました。

クリスマスに生まれるイエスを、1 節ではバラの枝と比喻されたマリアから真冬の半分の夜（真夜中）に咲きでたバラの花としてたとえ、2 節では、その神秘を、

清きマリアから — ist Maria die reine —

花が咲き（キリストが生まれ）— das Blümlein bracht —
神の永遠の摂理から — Aus Gottes ewgem Rat —
子供（キリスト）を産み — hat sie ein Kind geboren —
清純なおとめ（マリア）のままでいた — und blieb ein reine
Magd —

としています。

マリアの清さの故に子供が存在し、この子供は神の永遠の摂理によって神の意、即ち救いをもたらすために生まれ、マリアと子供を描写する列の中心に、人の救いを計画した神の摂理が隠された神秘として現されています。

Adeste fideles

きよしこの夜と並んで、全世界で有名なクリスマスの歌の代表的なものと呼ばれる聖歌です。

確かな原典は存在せず、発祥は18世紀の半ばにフランスとイギリスの間であったと考えられています。歌詞も、フランスに伝えられているものと、イギリスに伝えられているものの両方が存在していますが、共通しているのは、1節めの歌詞が同じであることです。そして、歌そのものが、歌詞の変化する前半と歌詞の変化しない後半（Venite adoremus Dominum）から成り立っていることから、先唱者と会衆のための歌であったことが考えられます。

また、この会衆が歌う歌詞の内容から、元来は聖体変化の際に歌われた歌ではないかとも考えられています。

第三部で演奏されるオルガン交響詩、“降誕の神秘”は、Jesu, Redemptor omnium という、クリスマスの当日、12月25日の午後の聖務日課に歌われていた賛歌（Veni, Redemptor gentium と同じ形式です）の旋律を元に、フランス、ロワール地方のオルガニストであったフォシャードが交響的な、規模の大きな変奏曲として作曲したものです。

それぞれの変奏曲にもテーマと聖書や賛歌からの副題がつけられており、同じ旋律を基礎としながらもとても異なる性格の描写的な曲となっています。今回のコンサートでは、変奏曲と、その元となったグレゴリオ聖歌を交互に演奏します。

付録②

「教会の響き」について

カトリックの教会では6月29日の日を「聖ペトロと聖パウロの祭日」としています。

聖ペトロはキリストの弟子たちのなかでもリーダー格だった人と思われており、イエス・キリストを救い主として信じる最初の共同体を統率しました。

ペトロの本名は「シモン」でしたが、イエスから「ケファ (kefa)」と呼ばれていました。「ケファ」とはイエスたちが使っていたアラム語で「岩」という意味です。聖書がギリシア語へ翻訳される過程で「ケファ」がギリシア語の岩を意味する「ペトロス (petros)」となり、これがラテン語にされ「ペトルス (Petrus) (慣用日本語訳表記ではペトロ)」という名称になりました。

マタイによる福音書によれば、イエスからペトロへの言葉として「Tu es Petrus et super hanc petram aedificabo ecclesiam meam et portae inferi non praevallebunt adversus eam. あなたはペトロ (Petrus)。わたしはこの岩 (petra) の上にわたしの教会 (ecclesia) を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。」と記されています。「教会 (ecclesia)」はイエスによって呼び集められ信仰を共にする共同体のことを指しますが、教会全体のことも意味します。このことから、カトリックの教会では、聖ペトロを初代の教皇として見なしています。

聖パウロはイエス・キリストの直接の弟子ではなかった人ですが、自身が厳格なユダヤ教信者としてキリスト教信者を迫害している最中に、復活したイエス・キリストに出会い、当時はユダヤ教から派出した一派でしか

なかった原始キリスト教会とも言えるユダヤ人の共同体の信仰を、アジアからヨーロッパ世界へと宣教しました。キリストの十字架の死と復活を、神による救いの計画の新しい時代の始まりの啓示とする教えは、ユダヤ人や異邦人という人種の枠や時代の枠を超えて全ての人へ今でも伝えられています。宣教の場所や方法は違えども、この2人の使徒によりキリスト教会の基礎は築かれました。

この、共通の信仰によって形成される人々の集まりである教会、即ちイエス・キリストによって集められた、信ずるものたちの「共同体としての教会」、そして、その共同体が集まる建物である「聖堂としての教会」——本日はこの「教会」をテーマにした作品を集めてみました。

グレゴリオ聖歌は、祈りの響きです。本日歌われる「Tu es Petrus」は交唱（Antiphona）という種類のもので、文字通り2つの聖歌隊の間や、先唱者と会衆というようなグループの間で交互に歌われるものです。今回はこの交唱の間に、旧約聖書におさめられた神への賛美の詩を集めた「詩編」より詩編142番「Lauda Jerusalem」が祈られます。

Lauda, Jerusalem, Dominum: * lauda Deum tuum, Sion.

Quoniam confortavit seras portarum tuarum: * benedixit filiis tuis in te.

Qui posuit fines tuos pacem: * et adipe frumenti satiat te.

Qui emittit eloquium suum terrae: * velociter currit sermo ejus.

Gloria Patri, et Filio: * et Spiritui Sancto.

Sicut erat in principio, et nunc et semper: * et in saecula saeculorum. Amen.

エルサレムよ、主をほめたたえよ／シオンよ、あなたの神を賛美せよ。
主はあなたの城門のかんぬきを堅固にし／あなたの中に住む子らを祝福してくださる。

あなたの国境に平和を置き／あなたを最良の麦に飽かせてくださる。

主は仰せを地に遣わされる。御言葉は速やかに走る。

栄光は父と子と聖霊に

初めのように今もいつも世々にいたるまで。アーメン。

アンリ・ミュレーは南フランスのドラギニアンという街のオルガニストをしていました。「あなたはペトロ（ペトラ・岩）」「薔薇窓」「鐘つき塔」の3曲は「ビザンツ・スケッチ」という10の曲から成り立つ作品集に収録されています。始めに演奏される「あなたはペトロ（ペトラ・岩）」の作曲者による原題は「*Tu es petra et portae inferi non praevalerunt adversus eam.*」とされています。ミュレーは「あなたはペトロ」の代わりに「あなたは岩」であると言い切ってしまう。この作品集の大きなテーマが「教会」そのものだということを考えると、教会（ecclesia）の存在そのものに、「あなたは岩（petra）である」と暗喩しているのかも知れません。

「薔薇窓」とはステンドグラスの種類の一つで、丸いばらのような形をしているものを指します。シャルトルの薔薇窓は特に有名です。教会から聞こえてくる鐘の音は、信者を祈りへと誘います。

本日は、今回のメインテーマとも言える「あなたはペトロ（ペトラ・岩）」をテーマとしたトッカータの後に、聖堂としての教会を現した2つの作品が続きます。

キリスト教の聖典は、聖書です。イエス・キリスト生誕以前の預言と、ユダヤの民と神との契約を記した旧約聖書、そしてイエス・キリストの教えに従った人が記したものを集めたのが新約聖書です。新約聖書の中でも特に重要なのが、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四人によって書かれた「福音書」と呼ばれるもので、イエスの生涯、そして受難、復活についての記録が記されています。「福音」とは「良い知らせ」という意味ですが、単なるイエスの生涯の記録としてではなく、イエスの死と復活により人々に救いがもたらされたことを「良い知らせ」として教えています。

ジャロミール・ワインベルガーは「聖書によるポエムス」の中で新約聖

書のエピソードを短く判りやすい音楽の言葉で描写しました。

一曲めでは、聖書の話の順番としては前後しますが、十字架刑による受難を受けた後に復活したイエスが、弟子たちの前に姿を現します。イエスの復活をまだ信じていなかった弟子たちは、イエスが十字架上で亡くなってしまったため希望に満ちた彼らの世界が崩壊し、失意の思いでエルサレムからも出てきた時でした。その道行き上一緒になった人が、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、イエスについて書かれていることを弟子たちに説明しました。その人がイエスだとは判らなかつた弟子たちは、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言ってイエスを引き留めるのですが、この後にイエスが、十字架にかかる前の晩に行った最後の晩餐と同じ行為をした後、弟子たちの目の前で消えてしまいます。そこで弟子たちは復活したイエスが共にいたのだと気づき、イエスの復活の証人としてエルサレムへ帰り活動を始めるのです。

次の「湖の上を歩く主イエス」は、時を遡りイエスがガリラヤ湖のほとりで宣教をしていた時の話です。日が暮れ、イエスが弟子たちを船で対岸へ行かせて一人で祈っていた間に嵐が起これ、弟子たちはどうやってイエスのところへいこうかと困っていた時に、湖の上をイエスが歩いて弟子たちのところへ来たことを描写しています。前半では激しい嵐、そして後半では対比するように希望に溢れる音楽となっています。

三曲めの「カナの婚礼」は、客をもてなすワインが底をついてしまった婚礼の席で、イエスが水をワインに変えたという、イエスが公の場で現した最初の奇跡を物語っています。

復活の前提となったイエスの受難は、イエスがエルサレムに入城することから始まります。その昔ユダヤ人が奴隷として拘束されていたエジプトから、神に導かれたモーゼの元で脱出をしたことを記念するユダヤの伝統的行事「過ぎ越しの祭り」を弟子たちとエルサレムで祝うために、イエスは弟子たちとともにエルサレムに入ります。ここで、ユダヤの民衆は、当時支配されていたローマからユダヤを解放する「メシア＝救い主」と思い

込み、やしの枝を振って「ホザンナ！」と大歓呼して迎えます。これが四曲めです。

ダヴィンチの絵画等でも有名な聖木曜日の「最後の晚餐」を五曲めは描写しています。イエスはパンとブドウ酒を取って弟子たちに分け与え、自分の記念としてこれからもこの食事を行うように弟子たちに言いました。カトリック教会の「ミサ」では、今日でもこの記念を行っています。ミサの都度、パンとブドウ酒はキリストのからだと血に変化し、それを信徒が分け合うことこそがミサの中心であるとともに、この儀式的うちにキリストが現存するのです。

最後の晚餐を弟子たちと過ごしたイエスはその晩に捕えられ、次の日の金曜日に十字架にかかります。神の愛による救いを説き、奇跡によるいやしをもたらしたイエスは、特に当時のパレスチナのユダヤ人社会から疎外されていた人々の間では熱狂的に受け入れられ、メシア、救世主と呼ばれていました。しかし伝統的なユダヤの律法学者にとっては、彼らの教えに対立するものであったため、「救世主」を自称することにより神を冒瀆したものとみなし、当時パレスチナ地方を支配していたローマへの反乱の指導者として、訴えられたのです。しかし聖書の記述によるとそれぞれの聖書に食い違いはあるものの、様々な伝承を通して、イエスが3日後には蘇生された死体としてではなく生きる人として復活し、多くの人が生きるイエスに出会ったという共通の経験が読めてきます。そして、それらの事件・経験を通してイエスが生きていること、死者のうちから復活したこと、天にあげられて神の栄光のうちにあることが確認されるようになり、「キリストの復活」はキリスト教会の信仰の中心となりました。

最後の曲「イスラエルよ、聞け」には「古いイスラエルの歌」というサブタイトルがついています。新約聖書にはマルコ書に「イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。」と書かれていますし、作曲者自身も新約聖書から曲のモットーを引用していますが、この聖句は古くから伝わっているユダヤ人の祈り「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である」(申命記 6, 4) でもあります。作曲者ワインベルガー

がユダヤ人の血をひき、ナチスのユダヤ人弾圧を逃れて亡命していたアメリカでこの曲を作曲していた事を考えると、宗教や民族を超えた心からの祈りの響きが聴こえてくるように思われます。

「アヴェ・ヴェルム・コルプス」は、モーツァルトのモテットが大変有名ですが、元は韻をふんだ祈りのテキストです。最後の晩餐ではイエスが自分の体と血であると宣言したパンとワインを「感謝して」弟子たちに与えたことが書かれていますが、この祈りでは、最後の晩餐を記念してキリストのからだと血であるパンとワインを分かち合うミサでの聖餐式のうちにも、主であるイエス・キリストがそこに実在するということを告げると共に、聖餐を通して神であるキリストと交わるということを私たちの死の瞬間にも経験する神との交わりとして経験することを勧めています。

メシアン作曲の「天上の饗宴」も又、聖餐式・聖体拝領をテーマとしています。キリストによって始められた「最後の晩餐」はこの地上で絶えることなく神と信徒の交わり、信徒同士の交わりのうちに行われていますが、この曲は永遠の光と愛である神のもとでの聖餐式をヴィジョンとして表現した作品です。メシアンは、神のうちにある天上での存在「喜びと至福の不変の光」と「天上の安らぎ」を長くゆったりとした、しかし昂揚感に満ち溢れる音楽で現します。そして、途中にペダルで演奏される水滴のような音形は、「血滴のモチーフ」です。キリストの流した血によって救いもたされるという新約聖書の様々な個所に書かれている「新しい創造」が象徴されています。

「永遠の教会の出現」にはメシアンは曲の表題とも言える直接的なモットーを付けていません。しかし、神の救いの恵みにより呼び集められた「神の民」としての教会、キリストの昇天後も、聖霊の息吹により、福音と教会と秘跡を通して絶えず人類に救いを働きかける教会、キリストを頭とする「キリストのからだ」としての教会、神の都、永遠のエルサレムを共に築く「共同体」としての教会、そのような「キリストを要石として生ける

石によって築きあげられた建物、神の住まい（エフェソ 3, 20-22）」である「永遠の、完全な」教会の姿をメシアンはこの曲を通して描き出そうとしたのでしょう。メシアン自身による曲の紹介をするテキストによれば、教会献堂式の賛歌（Vesper）に基づいているといいます。この賛歌「幸いなる都エルサレム（Urbs Jerusalem beata）」では、天空に、生ける石によってつくられた聖なる都、「新しいエルサレム」が謳歌されています。新しいエルサレムとはヨハネの黙示録から（黙示録 21）引用された言葉で、最後の審判と最後の戦いの後に天と地が新しくなり、新しい都、即ち新しいエルサレムが天より下ってくるとヨハネが幻視したものです。

教会の「出現」をメシアンは曲の前半の長く大きなクレッシェンドで表現し、又、後半ではデクレッシェンドによって空の彼方に漂い去る都を写述しています。そして、教会献堂式の賛歌に歌われている「のみ、金槌、苦悩と試練は選ばれた民、霊的な建物の生きた石を彫り、磨く」という職工的な描写をメシアンは脈動し続けるペダルの動きによって再現しています。

最後には、神を讃える詩編 117 番をモテットとしたグノーの合唱曲が歌われた後、ロンドンのウェストミンスター寺院の鐘、ビッグベンの旋律をモチーフとした作品「ウェストミンスターの鐘」で「教会の響き」は終わります。

注

- 1) 「教会聖堂内でのコンサート」についての声明、典礼省 1987 年 11 月 5 日
- 2) 同上
- 3) 同上
- 4) ミサ曲やマグニフィカートなどで、オルガンと聖歌隊など 2 つに分かれたパートが交互で演奏する方法